

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



12

よろこびの知らせ
第12集

目 次

種蒔きのたとえ	1
ルカ 8:4-8	
失われた者の救い	10
ルカ 15:1-7	
救いの喜び	19
ルカ 15:20-32	
わたしは、よみがえり	28
ヨハネ 11:21-27	

ここに収められたメッセージは、2020年9月にテキサス州
プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたも
のです。聖書箇所は “Gospel Project” に沿って選ばれてお
り、聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

種蒔きのたとえ

ルカ 8:4-8

8:4 さて、大ぜいの人の群れが集まり、また方々の町からも人々がいももとにやって来たので、イエスはたとえを用いて話された。

8:5 「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いているとき、道ばたに落ちた種があった。すると、人に踏みつけられ、空の鳥がそれを食べてしまった。

8:6 また、別の種は岩の上に落ち、生え出たが、水分がなかったので、枯れてしまった。

8:7 また、別の種はいばらの真中に落ちた。ところが、いばらもいっしょに生え出て、それを押しふさいでしまった。

8:8 また、別の種は良い地に落ち、生え出て、百倍の実を結んだ。」イエスは、これらのことを話しながら「聞く耳のある者は聞きなさい。」と叫ばれた。

一、たとえ話の主題

今月はイエスのたとえ話を学びます。イエスのたとえ話は全部で39あり、マタイの福音書に20、マルコの福音書に9つ収められています。ルカの福音書には27あります。マタイ、マルコ、ルカのどれにも載っているたとえは7つあり、種蒔きのたとえはそのひとつです。

種蒔きのたとえには、イエスご自身の解説がついているので、分かりやすく、イエスのたとえ話を学ぶ時は、かならずといってよいほど「種蒔きのたとえ」から始めます。それで、皆さんも、このたとえを何度も学んだことがあると思います。

しかし、何度も学びながら、見落としている大切なことがあるように思います。それは、イエスのたとえ話は

何を教えるために語られたのか、つまり、たとえ話の主題が何かということです。あとで学びますが、ここには四種類の土地が出てきます。「道ばた」（5節）、「岩地」（6節）、「いばらの地」（7節）、それから「良い地」（8節）です。ルカ 8:11 からの解説の部分を読むと、こうした四種類の土地は、神の言葉に対する四種類の態度であることが分かります。そして、そこには試練に耐えること（13節）や誘惑に打ち克つこと（14節）などが教えられています。それで、このたとえの主題は、試練に耐え、誘惑に克つといった信仰生活に関する勧めだと思われがちです。もちろん、そうしたことも大切なことですが、イエスのたとえ話にはそれ以上の主題があります。

それは何でしょうか。それは「神の国」です。イエスが宣べ伝えた神の国の教えは、人々には全く新しいものでした。それで、イエスは、人々がすでに体験している日常生活のさまざまなことがらを使って、人々がまだ体験していない神の国がどんなものかを教えようと思いました。そのために用いられたのが、「たとえ話」でした。マルコ 4:30 でイエスは「神の国は、どのようなものと言えよいでしょう。何にたとえたらよいでしょう」と言っています。イエスがたとえ話で教えようとしたのは神の国のことだったのです。ルカ 8:10 で、イエスは弟子たちに言いました。「あなたがたに、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの者には、たとえで話します。」ここで「神の国の奥義」という言葉が使われて

いることから、イエスのたとえ話の主題が、神の国であることが分かります。

ですから、イエスのたとえ話を学ぶときには、「神の国」とは何なのか、そのたとえ話が神の国について何を教えているのかを知る必要があります。まず、神の国とは何なのかということから考えてみましょう

二、神の国と福音

では、「神の国」とは何でしょうか。世界には、国際連盟に加入している国が193カ国あります。台湾、コソボ、パレスチナなど、まだ、国際的に独立国家として承認されていない地域も加えると200以上の国があります。こうした国々には、領土があり、独立した主権があり、制度や法律があって、国民がいます。神の国も同じです。神の国は「天」にあって、神が「王」、主権者であり、その法律は「神の言葉」、その国民は「神の民」や「聖徒」と呼ばれる信仰者たちです。信仰者はこの「天」を目指して地上の人生を歩んでいます。神の国は、信仰者たちにとって、「天のふるさと」（ヘブル11:16）のようなところです。

「天」は、決して空想の世界のものではありません。実在するものです。実際、イエスは天から地上に来て、天に帰っていきました。この地上で天を見せ、天を約束してくださいました。イエスは、天に帰る時が近づいたとき、弟子たちにこう言いました。「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんありま

す。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。………わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」（ヨハネ 14:1-6）ここでイエスは「天」と「天への道」を、はっきりと示しています。「わたしが道である」という言葉は、英語では“I am the way.”です。“I am a way.”ではありません。天への道はただひとつで、それは、イエスご自身です。イエスという道を通るなら、かならず天に行き着くことができます。私たちはこのことを知り、信じています。

さらに、イエスは、私たちが神の国に行くだけでなく、神の国が私たちのところにやって来ると言いました。イエスの宣教の第一声は「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」（マタイ 4:17）でした。また、イエスは、こうも言っています。「律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音は宣べ伝えられ、だれもかれも、無理にでも、これにはいろいろとしています。」（ルカ 16:16）神の国はイエスの宣教によって始まりました。「天のものが地上にやって来た、未来のものが現在実現している」と、イエスは教えたのです。

神は、この世界の創造者ですから、天ばかりでなく、この地も神の主権のもとにあるはずです。ところが、人

は、神の主権に逆らい、自分勝手な生き方をし、世界は、罪と悪、憎しみと恐怖が支配するところとなりました。そんな世界に正義と公正、愛と平和がとりもどされるには、私たちが進んで神の主権を受け入れ、その支配に服従して、神の民となる他に道はありません。

古代には、王に反逆した地域の人々は、滅ぼされたり、捕虜となって、征服した王の国に移されたりしました。二度と逆らえなくさせるためです。このことはユダの国に起こりました。ユダの国はバビロンに逆らったため、ついにエルサレムは神殿もろともほろほされ、エルサレムにいた人々はバビロンに捕らえ移されました。その時、エルサレムの人々にとって迫りくるバビロンの支配は、恐怖と絶望以外の何ものでもありませんでした。けれども、イエスがもたらす神の国は違います。神の国は赦しの国、神の支配は愛の支配だからです。神は、神に逆らい続けてきた世界に赦しを与え、反逆の民をご自分の民として迎え入れてくださるのです。神の国は、反逆の民を滅ぼす軍隊を伴ってやって来るのではなく、和解の使者を先頭に立ててやって来るのです。イエスは神の国の王でしたが、同時に、和解の使者ともなって、まず、和解の言葉を人々に語りました。いや、和解の使者であるだけでなく、ご自身が和解のいけにえとなって、十字架の上でご自分を捧げ、赦しを勝ち取ってくださったのです。

古代では、王に跡継ぎが生まれたとき、それを告げ知らせる言葉は「福音」と言われました。そして、そうし

た時には、かならず「恩赦」が宣言されました。負債が赦免されたり、税が軽くなったりしました。「福音」は「赦し」を意味しました。イエスが生まれたとき、天使たちは羊飼いに「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました」（ルカ 2:10-11）と告げました。ここで「知らせる」という言葉には、「福音を伝える」という意味の言葉が使われています。神の国の王となるべきお方の誕生は、まさに「福音」であり、その福音は救い主がもたらす罪の赦しの福音でした。

神の国は、赦しを伴ってやってきます。赦しの言葉、福音が宣言されて、神の国がやって来るのです。それで、ルカ 8:1 には「イエスは、神の国を説き、その福音を宣べ伝えた」とあって、「神の国」と「福音」の宣教が結びつけられているのです。「あなたの罪を赦す。あなたを神の国の民とする。あなたは神の国の豊かさを楽しむようになる」という「福音」を受け入れることによって、人は、神の国に受け入れられるのです。

三、神の言葉への応答

「神の国」や「福音」の意味が理解できれば、種蒔きのたとえの意味はおのずと分かるようになります。ルカ 8:11 から、イエスご自身が、このたとえを解説しています。そこに「種は神のことば」（11 節）とあるように、神の言葉が人を神の国に導くことが教えられています。種が「道端」にも、「岩地」にも、「いばらの地」に

も、蒔かれたように、神の言葉は、大勢の人々に語られました。しかし、神の言葉を聞いたすべての人が神の国を受け入れたわけではありません。「種」に命があるように、神の言葉には命があり、人を救う力があります。しかし、人がその命を受け入れ、その力を受け取らなければ、神の国は、その人のところにやっこないのです。

種は、四種類の土地に落ちました。「道端」は人の歩くところで、そこに落ちた種は芽を出すこともないまま、鳥に食べられてしまいました。これは、偏見や敵意のために御言葉に心を開かない、進んで聞こうとしない人間の不信仰で頑固な態度を表しています。

「岩地」に落ちた種は「芽」を出しはしましたが、柔らかい土がないため、根をおろすことができませんでした。そして、やがて枯れてしまいました。これは、喜んで御言葉を聞いても、それをきちんと理解し、自分のうちに根付くまで、御言葉を聞き続け、学び続けることのない態度を指しています。

また、「いばらの地」に落ちた種は、芽を出し、根をおろすことはできても、茨に塞がれて、実を結ぶことができませんでした。茨は「この世の心づかひや、富や、快楽」を意味します。人を御言葉から遠ざける誘惑のことです。神の言葉に対する頑固さや、浅い理解、また、神の言葉から離れて他のものに目移りすることなどは、私たちが日常、体験し、思い当たることがあるのではないのでしょうか。

「良い地」に蒔かれた種は「百倍の実を結」びました。「道端」よりも「岩地」、「岩地」よりも「いばらの地」に落ちたほうが種にとってはましでした。鳥のエサになった種、根をおろせず枯れてしまった種、そして実を結ばなかった種と、最悪のケースからすこしづつ良くなっているようですが、それでも、「良い地」に落ちた種が「実を結んだ」ことに比べれば、最初の三つのケースでは、種は無駄になっています。神は、神の言葉を聞く者に「実を結ぶ」ことを求めておられます。実を結んだ農作物はやがて刈り入れられますが、聖書で「収穫」は、神の国を表します。農夫の労苦が豊かな収穫によって報われるように、信仰者の地上の労苦は、神の国で報われるのです。人生に実を結ぶかどうかが、また、その収穫の喜びに与ることができるかどうかは、どのような態度で御言葉に聞くのかにかかっているのです。これは厳粛な事実です。

どんな作物でも、実を結ぶまでは、最低一年はかかります。同じように、神の言葉を学び、理解し、それが生活の中で実を結ぶようになるには、一定の時間が必要でしょう。しかし、どんなに時間をかけても、ただ漫然と時を過ごしているだけでは、御言葉が実を結ぶことはありません。きちんと御言葉を学び、正しい知識を身につけましょう。そして、知識が理解へ、理解が信頼に進むとき、それは信仰になるのです。神の言葉を聞いて、知って、分かって、信じる。その時、神の国が私たちのところに来るのです。

神の国は、二千年前、イエスの宣教と共にやってきました。そして、それはイエスの十字架と復活によって確立しました。十字架と復活によって罪と死の支配が終わったのです。さらに聖霊が降り、教会が生まれ、福音が宣べ伝えられ、神の国は世界に広まりました。やがて、神の国は、誰の目にも見えるかたちで現れます。収穫の時が来るのです。その時まで、神の言葉に聞き続け、従い続ける人は、収穫の喜びにあずかることができます。私たちは、15節にあるように、「正しい、良い心でみことばを聞」き、「それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせる」者になりたいと願っています。そのことを祈り、また、互いに励まし合っていこうではありませんか。

(祈り)

父なる神さま。あなたは、福音の言葉によって、私たちが御国の喜びの中に招いてくださっています。私たちに御言葉を聞く「正しい、良い心」を与えてください。そのことによって、私たちを、神の国の平安と喜びで満たしてください。神の国をもたらししてくださったイエス・キリストにより祈ります。

失われた者の救い

ルカ 15:1-7

15:1 さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。

15:2 すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」

15:3 そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。

15:4 「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。

15:5 見つけたら、大喜びでその羊をかついで、

15:6 帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。

15:7 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。

今月は、イエスのたとえ話を学んでいますが、「種蒔きのたとえ」の次に有名なたとえ話が、ルカ 15 章のたとえ話です。ここには、失われたものが三つ出てきます。

「羊」と「銀貨」と「息子」です。「羊」、「銀貨」、「息子」のそれぞれは神のもとから失われた人々のことです。先週、イエスのたとえ話の主題は神の国であると学びましたが、ルカ 15 章のたとえ話では、神の国は、神のもとから失われていたけれども、見出されて神のもとに立ち返った人々によって成り立っていることが教えられています。

実際、イエスのもとに集まり、イエスの言葉を聞いて、神の国を受け入れた人たちは「取税人」や「罪人」と呼ばれていた人たちでした。取税人は、ユダヤ人でありながら、ローマ帝国の手先になって、同じユダヤ人から税を取り立てていました。しかも不正な取り立てをしていましたので、人々から蔑まれていました。また、「罪人」と呼ばれたのは、犯罪を犯した人や、不道德な生活をしてきた人ばかりではありません。律法に従って安息日を守ることができない羊飼いななどの職業の人たち、病気の人やからだの不自由な人たちもまた、「罪人」と呼ばれていたのです。

そして、イエスがそうした人々を受け入れていると非難したのが、「パリサイ人、律法学者」たちでした。このたとえ話は、こうした非難に答えるものでもありました。イエスは、このたとえ話で、ご自分への非難に、三つの面で答えています。

一、価値ある存在

第一に、イエスは、「わたしと一緒にいる人たちには価値がある」と言いました。イエスは、パリサイ人や律法学者たちが、「罪人」と決めつけていた人々を、このたとえでは「失われた人」と呼びました。本来は、神のもの、価値あるもの、愛されていた人々なのです。イエスは、不当に蔑まれていた人々の価値を認め、それをおおやけに宣言しました。ルカ6章に「貧しい者」、「飢えている者」、「泣いている者」のほうが、富んで入る人、食べ飽きている人、笑っている人よりも、幸いであ

るとある通りです（ルカ 6:20-25）。ルカの福音書には、当時軽んじられていた女性や子ども、貧しい人や病気の人が多く登場します。それは、人がそうした人々の価値を認めなくても、神は、ひとりひとりの価値を認めておられる。そのことを教えるためでした。

聖書では、羊飼いは神、羊は神の民を表しています。詩篇 23 には「主は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます」と歌われています。詩篇 100 篇には「知れ。主こそ神。主が私たちを造られた。私たちは主のもの、主の民、その牧場の羊である」とあります。羊は早く走る足を持たず、相手に立ち向かっていく爪も牙もありません。簡単に他の動物の餌食になってしまう弱い動物です。おまけに、視力も弱く、視野も狭いそうで、羊を狙う動物が近づいてきてもそれに気付かないことが多いのだそうです。

人間もまた、他の動物のような強い力を持っていません。素手で熊と闘って勝った人がいないわけではありませんが、それは例外です。人間が他の動物に勝っているのは、知恵の部分で、人間は知恵を使って他の動物を従え、自然を開発してきました。しかし、人間の強みである知恵・知識も、それが間違っていて使われると、自分自身を苦しめ、他の人を傷つけ、自然を破壊するものになってしまいます。羊が羊飼いを必要とするように、人には、人生に意味と目的を与え、知恵・知識を正しく導いてくださる神が必要なのです。そして神は、進んで、私

たちの羊飼いとなってくださいます。神は、それほどに、私たちを尊いものとしておられるのです。

「銀貨」のたとえ話もまた、人間の価値を教えてください。ここで「銀貨」と訳されている言葉、「ドラクマ」は、ギリシャの通貨で、ローマの通貨である「デナリ」とほぼ同じ価値があり、それは一日分の賃金に相当しました。しかし、「ドラクマ」を溶かして銀にしてしまったら、それは、ごくわずかな価値しか持たず、とても一日分の賃金にはなりません。貨幣が価値を持つのは、それを発行した政府の刻印が押されているからです。100ドル冊も紙としては100ドルの価値はありません。しかし、そこにアメリカ政府の刻印が印刷されると、その価値を持つようになるのです。

私たち人間も同じです。人間は、聖書が教えるように、そのたましいに、神からの刻印、「神のかたち」を押されているので、価値あるものとなりました。ある人が「人間の値段」を計算したそうです。私たちの体の70パーセント以上は水です。水は一応ただということにしました。次は脂肪ですが、これは石鹼を一個作れるぐらい、あとは釘数本分の鉄分、マッチ数本分のリンがあります。人間のからだを元素に還元したらせいぜい10ドルぐらいにしかならないという結果になりました。しかし、私たちは、人間がそんなに安っぽいものではないことを知っています。ドラクマにはギリシャ神話の神々の姿が刻まれています。人のたましいには、創造者であるまことの神の似姿、「神のかたち」が刻まれています。

す。金属のかけらに神々の姿が刻まれば、それが材料以上の価値を持つのであれば、「神のかたち」に造られた人間には、もっと大きな価値、全世界のどんなものにもまさる価値があるのです。

二、愛されている存在

第二に、イエスは、「この人たちは、神に愛されている」と答えました。

羊のたとえ話で、羊飼いが、羊が一匹いないことに気づいたのは、おそらく、羊を囲いに入れるときだったと思います。このたとえ話の劇で、羊飼いが羊を囲いに入れる時、「一匹、二匹、三匹、…九十八匹、九十九匹。あれ、一匹足りないぞ」と言う場面があるのですが、それは正しくないと思います。羊飼いは、たとえ羊が五十匹いても、百匹いても、一匹一匹に名前をつけ、羊を囲いに入れるときには、一匹、一匹その名前を呼びました。私たちの羊飼いであるイエス・キリストも、同じです。世界に八十億の人々がいても、人々を数字で数えたりはしません。ひとり、ひとりの名を呼んでくださるのです。番号で呼ばれるのは囚人だけです。イエスは私たちを囚人のようには扱いません。「八十億分の一」としてではなく、かけがえのない人格として扱ってくださるのです。

羊を囲いに入れるのはたいてい夕暮れです。羊飼いは、いなくなった羊を捜しに行くのですが、夕暮れになってから野山に出ていくのは、羊飼いにとっても危険なことでした。しかし、羊飼いは「他に九十九匹いるの

だから、一匹くらい失ってもしようがないか」とは考えませんでした。危険を冒してでも、いなくなった一匹を熱心に捜し求めました。この羊飼いの姿は、失われた者を捜し求めてやまないイエス・キリストの姿を描いています。イエスは、「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです」（ルカ 19:10）と明言しています。ひとりひとは、イエス・キリストが、捜し求めておられるほどに、愛されている人たちなのです。

ある教会を訪ねたとき、廊下の掲示板に小さな鏡が貼ってありました。そして、その鏡の枠に、「キリストが代わりに死んでくださったほどの人」（ローマ 14:15）と書いてありました。その鏡を覗き込んだ人々は、その鏡に自分の顔を見て、私は「キリストが私のために祈りをささげてくださったほどに、愛されている、価値を認められている」ことを心に刻んだことでしょう。

アメリカの子どもたちは、日本の子どもたちよりも、自分が「かけがえのない、愛されている」存在であることをよく知っているように思います。それは、健全な「セルフ・エスティーム」を持つよう、教えられているからです。日本では親が自分の子どものことを良く言う「親ばか」だと言われ、自分の配偶者をほめると「のろけている」と言われます。自分の価値も、他の人の価値も認められないので、劣等感に陥ったり、他の人をけなして自分が上になろうとする誤った方法で優越感を持つとうとします。それは、人を愛してくださる神を知らず、自分も他の人も神に愛されている存在であることが

分かっていないからです。そして、それが不幸な世の中を生み出すのです。私たちは一人残らず神に愛されている。私たちは、世界中のすべての人に、とくに、愛の神を知らない、日本の人々にそのことを知って欲しいと、心から願っています。

三、受け入れられた存在

第三に、イエスは、「この人たちは、神に受け入れられた人々である」と答えました。羊は神のまきばに戻り、銀貨は宝石箱に戻り、息子は父の家に帰ってきたのです。羊を見つけた羊飼いは大喜びで、友だちや近所の人たちを呼び集め、その喜びを分け合いました（ルカ6節）。銀貨を見つけた女の人も、友だちや近所の女性たちを呼び集めて、「なくした銀貨を見つけましたから、いっしょに喜んでください」と言いました（9節）。息子を取り戻した父親は祝宴を開いています（24節）。これは皆、天での喜びを表しています。イエスは「ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです」（ルカ15:7）と言っています。

パリサイ人や律法学者は、イエスとともにいる人たちを「罪人」と呼びましたが、イエスは、彼らを「失われた人」と呼び、その「失われた人」に注がれている神の愛を語りました。イエスと一緒にいる人たちが罪人だとしても、彼らは「悔い改めた罪人」であって、神は、なによりも罪人の悔い改めを喜び、悔い改めた者を受け入れてくださると言いました。神が人の悔い改めを喜び、

悔い改めた人を受け入れてくださることは、聖書に、すでに書かれていたことでした。エゼキエル書にこうあります。「彼らにこう言え。『わたしは誓って言う。——神である主の御告げ。——わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。…』」（エゼキエル 33:11）聖書の専門家を自称していたパリサイ人や律法学者が、この言葉を知らなかったわけはなかったでしょう。この聖書がイエスによって実現しているのを、目の前で見ながら、それを受け入れなかったのです。

人を「罪人」だというなら、すべての人は罪人です。パリサイ人や律法学者は、自分たちは「義人」だと主張しましたが、聖書によれば「義人はいない。ひとりもない」（ローマ 3:10）のですから、彼らもまた「罪人」だったのです。私たちは皆罪人です。しかし、悔い改めた罪人と、悔い改めない罪人がいます。神の国は、悔い改めた罪人によって成り立ち、人々が悔い改めて神のもとに帰って来るとき、そこに大きな喜びがわきおこるのです。私たちが味わう神の国の喜びは、罪人であった私たちが、神に受け入れられ、神が私たちの悔い改めを喜んでくださることにあります。

私たち皆が、この喜びに導かれていきましょう。イエスは失われていた私たちを取り戻すため、捜し出して救うため、あの十字架を背負ってくださいました。キリストは「…自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために

生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」（ペテロ第一2:24-25）この御言葉がひとりびとりに成就しますよう、心から祈ります。

（祈り）

私たちを愛し、捜し求めてくださる神さま。栄光に満ちた神の国が、悔い改めた罪人によって成り立っている。不思議なことですが、それは、神さま、あなたが、私たちの悔い改めを喜び、主イエスのゆえに、悔い改める者に赦しを与えてくださるからです。きょうもそのことを信じて、失われた者の救いを喜び、また、さらに多くの人の救いを祈り求めることができますように。イエス・キリストのお名前によって祈ります。

救いの喜び

ルカ 15:20-32

15:20 こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。

15:21 息子は言った。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』

15:22 ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。』

15:23 そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。

15:24 この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた。

15:25 ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。それで、

15:26 しもべのひとりを呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、

15:27 しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、おとうさんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』

15:28 すると、兄はおこって、家にはいろいろともしなかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。

15:29 しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことがあります。』

15:30 それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』

15:31 父は彼に言った。『おまえはいつも私といっしょにいる。私

のものは、全部おまえのものだ。

15:32 だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』』

一、放蕩息子の悔い改め

ルカ 15 章のたとえ話には失われたものが三つあります。「羊」と「銀貨」と「息子」です。そのどれもが見つげ出され、それぞれ、羊飼いのもとに、持ち主の女性に、そして父親のところに返っていきました。そして、失われたものが戻ってきたとき大きな喜びがわきあがりました。それは神の喜び、天の喜びを表しています。私たちも、失くしたものを一所懸命捜して、それを見つけたら、大喜びしますから、神の喜び、天の喜びがどんなに大きなものかを理解することができると思います。

きょうは、ルカ 15:11 から始まる「放蕩息子のたとえ」を学びますが、ここには、今までの二つのたとえには無かったことが書かれています。それは失われていたものが「悔い改める」ということです。最初のたとえの「羊」は人間のように悔い改めることはできませんし、二番目のたとえの「銀貨」には意志すらないのですから、悔い改めとは全く無縁です。

しかし、「放蕩息子」は違います。彼は、父親に財産の生前贈与を要求し、それを受け取ると、父の家を捨て、自分の町を離れて遠い国に行きました。そして、父親から得た財産をすべて「湯水のように使」い果たして

しまいました（13節）。「放蕩」の「蕩」という漢字は「くさかんむり」に「湯」と書きます。「湯」という文字が使われているように、これには「湯水のように無駄にする」という意味があります。彼は、お金ばかりでなく、自分の人生をも無駄にしてしまいました。それは誰のせいでもなく、彼自身の誤った選択によるものでした。そして、無一文になったとき、その地方に飢饉がやってきました。彼は食べるのにも困り、ブタの餌で空腹を満たそうとさえしたほどでした。人間として、もうこれ以上落ちるところはないところまで落ちました。それは、彼が父親の心に逆らったからでした。

考えて見れば、目に見える世界で、神に逆らって生きているのは人間だけかもしれません。自然も生き物も神の定めに従って生き、動き、存在しています。人間だけが、神から与えられた、自由を使って、神に逆らい、その結果、自分を苦しめています。放蕩息子の姿は、私たちの姿そのものです。放蕩息子の苦しみは、いわば自業自得ですが、愛の神は、そんな自業自得の苦しみにあえていっている者であっても、あわれんでくださり、人をそこから救おうとされます。私たちがどんなに間違った選択を重ねて、どんな惨めな状態になったとしても、そこから救われるための選択を、神は残していてくださいます。それは「悔い改め」という選択です。

放蕩息子は、どん底まで落ちて、やっと「我に返り」しました（17節）。口語訳では「本心に立ち返った」とあります。彼は、遠いふるさと、父の家を思い起こしまし

た。そして父親のところに帰ろうとして、立ち上がり、一步を踏み出しました。彼は、自分の罪を認め、それを悲しみ、意志を働かせて行動を起こしました。これが「悔い改め」です。神は、人がどんなに罪にまみれていても、罪を認め、それを悲しみ、そこから回れ右をして神のもとへ立ち返ることができる、知性と感情と意志とを残してくださっています。「悔い改める」という救いに至る選択ができるようにしてくださっているのです。人間は地上で、神に逆らっている唯一の生き物かもしれませんが、人間には他の生き物には決してできないこと、「悔い改める」ことができます。放蕩息子はそのことをしました。あなたはどうでしょうか。

二、父の喜び

さて、放蕩息子が家に帰ったとき、父親はどうしたでしょうか。親の顔に泥を塗るようなことした息子が帰ってきた場合、ふつうなら、父親は決して家の中に入れてません。地面にひざまずかせ、子供をにらみつけて、「何しに帰ってきたのだ。申し開きがあれば、言ってみろ」と叱りつけたものです。

ところが、この父親は、息子の帰りをまちわびていて、息子が変わり果てた姿になっているのに、息子を見つけました。息子が父親の姿を認める前に、父親が息子の姿を認めたのです。「そして、走り寄って彼を抱き、口づけし」ています（20節）。息子は、あわてて「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格は

ありません」(21節)と言って詫びました。「雇い人のひとりにしてください」(19節)と言うつもりだったのに、父親はそれをさえぎって、召使いたちに命じました。「急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。」当時、召使いたちはみな裾の短い服を着て、裸足で働いていました。父親が持ってくるように言った着物は、すその長い服で、その家の息子であることを表すものでした。履物もそうです。「指輪」は印章の代わりになるもので、父親の代理人、後継者のしるしでした。ここには、子どものことを思う親の愛が見事に描かれており、そして、それを通して、私たちの天の父である神の愛が力強く物語られています。

マルチン・ルターは、この箇所を説明して、こう言いました。「財産も地位もある人は、裾の長い服を着ていて、何をするにも、ゆっくりと行動したものだ。こういう身分の人は何があっても決して走らない。そんなことをしたら、街中の笑い者になるだろう。ところが、この父親は、弟息子を見つけたとき、長い服の裾をたくしあげ、すねを見せて走った。神もまた、われわれ罪人が神のもとに返るとき、そんなふうに走り寄って迎えてくださるのだ。」ルターが言うように、このたとえ話には、悔い改める者への神の愛や、罪人の悔い改めに対する神の喜びが、みごとに言い表わされています。「そして彼らは祝宴を始めた」(24節)のですが、この祝宴が天の喜びを表すものであることは言うまでもありません。

三、兄の怒り

ところが、この喜びを一緒に喜ぶことのできなかつた者がいました。放蕩息子の兄です。兄が、野良仕事から帰ってくると、家から賑やかな音楽が聞こえてきました。お祭りの日でもないのに、みんなが食べたり、飲んだり、歌ったり、踊ったりしており、しかも、それは、弟が帰ってきたからだというのです。兄は、それを聞いて怒り、家に入ろうとしませんでした。父親がやってきて、兄をなだめるのですが、兄は「ご覧なさい。長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません。それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか」（29-30節）と父親に抗議しました。兄は、弟のことを「このあなたの息子」と呼んで、「あいつは、俺の弟なんかじゃない」と、冷たく突き放しています。

このたとえ話では、弟息子は「取税人や罪人たち」（1節）、兄は「パリサイ人や律法学者」（2節）を指します。パリサイ人や律法学者は、自分たちこそ神の国にふさわしい者であって、取税人や罪人たちが神の国に入れるわけがないと思っていました。しかし、最初から神の国にふさわしい人など、どこにいるのでしょうか。自分の罪を帳消しにできるほどの善い行いを積み重ね、神の国にストレートに入れるほどの完全な人格を、誰が身に

つけているというのでしょうか。そのような人は、この地上には誰ひとりいません。誰であっても、その罪が赦され、神に受け入れられ、その子どもとしていただけるのは、その人の力によってではなく、ただ神の恵み、あわれみによるのです。神の国の門は自分の罪を知り、それを悔い改めた者だけに開かれています。神の国の喜びは罪の赦しの喜びです。それは、悔い改めた者だけが味わうことができる最高の喜びです。神もまた、罪人の救いを、他のどんなことよりも喜んでくださるのです。

私は、最初に、「ルカ 15 章には失われたものが三つある」と言いましたが、じつは、四つかもしれません。放蕩息子の兄もまた「失われた人」でした。彼は父親と一緒にいましたが、その心は、父親から遠く離れていました。父親の愛を知らず、その心を理解していませんでした。現代、この兄のような人が大勢いるように思います。人の弱さや痛みを分かってあげられない、また、人の喜びを一緒に喜ぶことができない人です。そのためにいつも人に冷たく当たり、人をさばくのです。また、他の人が喜んでいると、「あんなことで喜んで、ばかじゃないだろうか」と冷たく人を見下すのです。そういう人は、福音を聞いても、信仰の喜びに入ろうとしません。兄が家に入ろうとせず、外の暗闇にいたのと同じです。しかし、父親が家の外に出て兄を説得したように、私たちの父なる神は、兄息子のような人にも語りかけ、救いの喜びの中に入るよう、招き続けておられます。

私はここを読むたびに、コリント第二 5:19-20 の言葉を

思い起こします。こう書かれています。「神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私たちにゆだねられたのです。こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。」神は、私たちの罪を赦し、ご自分の子どもとして受け入れるため、イエス・キリストの十字架によって「和解」の道を備え、その和解を受け入れるようにと「懇願」・「嘆願」しておられます。本来なら、人間が神に「罪を赦してください。救ってください」と懇願・嘆願しなければならないのに、神が人間に懇願・嘆願しておられるのです。ルカ 15 章は、父親の兄息子への嘆願の言葉で締めくくられています。兄息子が父親の言葉にどう答えたかは書かれていません。この物語の続きは、私たちひとりびとりが書くのだと思います。あなたが書く物語の結末はどのようなものでしょうか。父なる神の「愛の訴え」に心を開き、それにお答えしましょう。さあ、いっしょに、天の喜びの中に入りましょう。

(祈り)

私たちの父なる神様、あなたは「放蕩息子」のような私たちを愛し、あなたの「息子」「娘」として受け入れてくださいました。それだけでなく、「放蕩息子の兄」のような冷ややかでゆがんだ者だった私たちを、罪の暗闇から、喜びの祝宴へと導き入れてくださいました。あ

あなたは、それほどに罪人の悔い改めと救いを喜んでくださるのですから、私たちもそれを大いに喜ぶことができますように。そして、あなたにもっと喜んでいただくため、この救いを人々に証しすることができるようにしてください。イエス・キリストのお名前によって祈ります。

わたしは、よみがえり

ヨハネ 11:21-27

11:21 マルタはイエスに向かって言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」

11:22 今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。」

11:23 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」

11:24 マルタはイエスに言った。「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。」

11:25 イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」

11:26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」

11:27 彼女はイエスに言った。「はい。主よ。私は、あなたが世に來られる神の子キリストである、と信じております。」

イエスは、ヨハネの福音書で、7回、「わたしは…です」と言われました。「わたしはいのちのパンです。」

(6:48) 「わたしは、世の光です。」 (8:12) 「わたしは門です。」 (10:9) 「わたしは良い牧者です。」

(10:14) 「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」 (14:6) 「わたしはまことのぶどうの木…です。」

(15:1)、そして、「わたしは、よみがえりです。いのちです。」 (11:25) きょうは、この言葉について話

します。

一、イエスの涙

イエスがこの言葉を語ったのは、ラザロが亡くなった

ときでした。ラザロはマルタとマリヤの兄弟です。ベタニアにあったラザロの家は、イエスと弟子たちがユダヤにきたときには必ず泊る場所で、ラザロは兄弟三人でイエスの働きをサポートしていました。イエスはラザロを「友」と呼ぶほどに（ヨハネ 11:11）、ラザロと深い心のつながりを持っていました。ですから、ラザロの死は、イエスにとって、特別なものでした。それでイエスは、ヨハネ 11:35に「イエスは涙を流された」とある通り、ラザロの死をいたんで涙を流されました。ここは英語では“Jesus wept.”と、二つの単語だけしか使われていません。聖書で一番短い節です。しかし、この言葉はじつに、多くのことを語っています。

「イエスは涙を流された。」この言葉を読んで「イエスは神であり、救い主であるのに、人間と同じように涙を流す、泣くというのは、おかしいのではないか」と考える人がいるかもしれません。確かに、神は、私たちと違って、泣いたりわめいたり、あたりかまわず怒りちらしたりなさるお方ではなく、いつ、どんな場合でも、冷静、沈着にものごとを判断し、対処なさるお方です。しかし、神を、どんな感情もお持ちにならない鉄のようなお方、どんなことにも気持ちを表わさない石のようなお方と考えるのは間違っています。聖書を読むと、神がどんなに感情豊かなお方であるかが分かります。

ルカ 15章のたとえ話では、羊を見つけた羊飼いや、銀貨を見つけた女性も、帰ってきた息子を迎えた父親も、大喜びして、その喜びを近所の人に知らせたり、雇い人

全員といっしょに祝宴を開いたりしています。これは、神が私たちの悔い改めをどんなに喜んでくださるかを教えています。また、聖書は、もし人が悔い改めなければ、神がどんなに悲しまれるかということも教えています。神ご自身が人の罪のために涙を流されます。「それゆえ、わたしはヤゼルのために、シブマのぶどうの木のために、涙を流して泣く。ヘシュボンとエルアレ。わたしはわたしの涙であなたを潤す。」（イザヤ 16:9）イエスは、エルサレムのために嘆きました。「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者、わたしは、めんどりがひなを翼の下にかばうように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。」（ルカ 13:34）また、聖霊も、私たちのために悲しむのです。「神の聖霊を悲しませてはいけません」（エペソ 4:30）とある通りです。ちょうど親が子どものことで喜んだり、悲しんだりするように、たましいの親である神は、人を愛して、人の心の状態や行いに一喜一憂されるのです。

イエスがベタニヤに来られたとき、最初にイエスを迎えたのはマルタでした。それからマリヤがやって来ました。マルタはそんなにとりみだしはしませんでした。マリヤはイエスの前に来て、ただ泣くばかりでした。マリヤと一緒に来た村人たちも同じでした。イエスは、そんな人々の悲しみを見て涙されました。イエスは、人々の悲しみを自分の悲しみとして、涙を流されたのです。

皆さんの多くは、それぞれに愛する人を亡くした経験があると思います。そのような悲しみの中でいちばん支えになったのは何だったのでしょうか。あなたの悲しみをいっしょに悲しんでくれた人々がいたことだと思います。「つらいこともあれば、いいこともありますよ」「わたしの場合はこうやって悲しみを乗り越えました」など、人は親切のつもりで、そう言うのですが、悲しみの中にある人には、そうした言葉が教訓めいたものや、押し付けがましいものに聞こえてしまうことがあります。悲しむ人は、ただ側にいていっしょに悲しんでくれることを願い、自分といっしょに共感してくれる人を求めているのです。

チェスや将棋、また囲碁で、コンピュータと人間が対戦することがあります。あるとき、コンピュータと対決して勝ったチェスのチャンピオンがこう言いました。「難しい対戦だったけど、最後は、周りの人たちが大勢でぼくを応援してくれた。だが、対戦したコンピュータに声援を送るコンピュータはなかった。」ここに、人間と機械の違いがあります。機械は、互いに励まし合うことができないのです。共感がないのです。しかし、人間は、悲しみの時に慰め合い、苦しみの時に励まし合うことができ、うれしいときに一緒に喜ぶことができます。そして、その「共感」が力になるのです。もし、人間にそれが無くなったら、人間はコンピュータ以下になってしまうでしょう。神はコンピュータのようなお方ではありません。イエスが人々の悲しみに共鳴して涙してくだ

さったように、私たちと共に涙を流してくださるお方です。このことは、いろいろなことで涙を流す私たちに、神の前で泣いていいのだという安心感を与えてくれます。

二、イエスの死

イエスは私たちの悲しみに共感して涙を流していただきました。しかし、それが、イエスが涙を流された理由のすべてではありません。イエスの涙には、私たちが流す涙がとうてい及ばない、もっと深い意味があります。イエスがラザロの墓に来たのはラザロを生き返らせるためでした。ナインという町のやもめのひとり息子が亡くなったとき、イエスは母親に「泣かなくてもよい」と言って息子を生き返らせました（ルカ 7:11-17）。会堂司ヤイロの娘が亡くなったときも、嘆き悲しんでいる人々に「泣かなくてもよい」と言って、娘を生き返らせています（ルカ 8:41-56）。ところが、ラザロを生き返らせる時には、イエスは、人々に「泣かなくてもよい」とは言われず、人々と一緒に泣いているのです。なぜでしょうか。

このイエスの涙と嘆きの意味を知るには、ゲツセマネでのイエスの姿を思い浮かべる必要があるでしょう。十字架にかかれる前、イエスはゲツセマネの園で額から血の汗が流れ出るほどに悲しみもだえて祈り、「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです」と言われました（マタイ 26:37-38）。死を見るはずのない神の御子が、これから死を味おうとしておられる。罪も汚れも知らないお方が、十字架の上で罪人となって神から見放されようとし

ている。人間の罪と、その結果である死と刑罰は、神の御子をそれほどに苦しめるものだったのです。神からまったく離れてしまった人間は、自分の罪のがどんなに重く、大きいかさえも気に留めず、そのことに嘆こうともせず、神の正義の審判を恐れなくなっていますが、イエスは、そのような人間の罪と、神への叛逆、また不信仰の一切を引き受け、ゲツセマネで苦しみ、十字架で死なれたのです。イエスのこの苦しみは、私たちのための苦しみでした。私たちが苦しまなければならない苦しみを、イエスは、私たちに代わって苦しんでくださったのです。そして、その苦しみなしには、あとに続く復活はなかったのです。

ラザロが亡くなったのは、十字架が間近に迫った時であり、ラザロの死と葬りはイエスの死と葬りを示すものでした。イエスはラザロの墓に向かうとき、ご自分もまた、十字架の苦しみと死を通り、墓に葬られることを全身で感じ取ったのです。ラザロの死の中に、ご自分の死を重ね合わせて見たのです。人間の罪と、罪がもたらす死の現実を思い、それに対して涙したのです。イエスの涙、それは、イエスが私たちを救うため背負ってくださった苦しみを言い表しています。イエスは、私たちの悲しみをともにしてくださるだけでなく、その悲しみの元になっている罪を解決してくださるお方です。だからこそ、イエスは私たちの涙をぬぐうことができるのです。イエスを信じて救われましょう。イエスが私たちのために受けてくださった十字架の苦しみ、私たちのため

に流してくださった涙を、私たちは無駄にしてはならないのです。

三、イエスへの信仰

ラザロの墓に着いたとき、イエスは墓を塞いでいる石を取り除けさせ（39節）、「ラザロよ。出て来なさい」と命じました（43節）。すると、死んで四日も経っていたラザロが生き返って墓から出てきました。

イエスは、ラザロを生き返らせる前に、マルタに言われました。「あなたの兄弟はよみがえります。」（23節）すると、マルタは、「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております」（24節）と答えました。話がかみ合っていない。イエスは、ラザロが今、生き返ると言っているのに、マルタは、それを遠い将来に実現することと考えていました。マルタは「終わりの日のよみがえり」を信じていました。しかし、イエスご自身が死からよみがえるお方であり、また、人々をよみがえらせるお方であることを、まだ知らないでいました。彼女は「よみがえり」を信じていましたが、その「よみがえり」を実現するお方が、今、目の前にいるイエスであることが分かっていなかったのです。信仰には、歴史上の事実や、確かな真理、間違いのない教えを信じるという面と、歴史の中に働き、ご自分を現してくださっている神ご自身を受け入れ、神に信頼するという面があります。マルタは、イエスの教えを知り、理解していましたが、彼女には一歩進んで、イエスご自身を受け入れ、信頼する信仰が必要だったの

です。

それで、イエスはマルタに「わたしは、よみがえりです。いのちです」（25節）と言われました。この言葉は、他の「わたしは…である」という言葉と同じように、「わたし」という言葉が強調されています。続く言葉、「わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません」（26節）でも、「わたし」という言葉が強調されており、これは、イエスを信じる者に、今、この世で永遠のいのちが与えられることを言っています。

イエスはラザロを生き返らせ、ご自分が復活することによって、「わたしは、よみがえりです。いのちです」と言われたことが、そのとおりであり、イエスが生ける神の御子キリスト、永遠のいのちの与え主であることを実証しました。イエスがマルタに「このことを信じますか」と問われたのは、ご自分の復活以前でしたが、マルタは「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております」と答え、イエスご自身への信仰を言い表しています。マルタがそう答えることができたなら、イエスの復活の後に生きる私たちは、マルタ以上に、もっと確かに、「はい。主よ。私は、あなたがよみがえりであり、いのちであることを信じます」と答えることができるはずです。

復活の力なしに、私たちは、新しい人生を歩むことはできません。私たちの救いと、カブよい人生が「わたしはよみがえり、わたしはいのち」と言われるイエスにあ

ることを知り、信じて、この週も、確かな一歩を踏み出しましょう。

(祈り)

父なる神さま、日曜日、イエスの復活の日に、イエスが私たちの涙を拭い、私たちを悲しみ、痛み、苦しみから回復させてくださる「よみがえり」の主であり、私たちを生かす「いのち」の主であることを確認することができ、感謝します。さまざまな悲しみや困難に出会うとき、イエス・キリストが「わたしの」よみがえりであり、「わたしの」いのちであることを覚え、主イエスから癒やしと力を受けることができるよう、導き助けてください。あなたの御子、私たちの救い主、イエス・キリストのお名前です。

1945（昭和20）年、日本は戦争に負け「ポツダム宣言」を受け入れ、連合軍の占領下に置かれました。占領下ではあっても、日本の主権は認められ、最高司令官司令部（GHQ）は日本の政治を大きく変えていきましたが、「国語」をはじめとして、日本の文化を尊重しました。日本の国語を英語にしたり、日本語をローマ字表記にするなどの案がありましたが、それらは受け入れられませんでした。

1946（昭和21）年元旦、「天皇の人間宣言」があり、多くの国民はこれを歓迎しました。天皇制は残りましたが、新しい憲法（1946年）のもとで、天皇は「象徴」となり、天皇の写真（御真影）は取り除かれ、国家と神社は分離され、靖国神社なども一宗教法人となりました。海外に建てられた神社も取り除かれました。

教会はそれまでの国家の統制から自由になり、数多くの宣教師が来日し、「キリスト教ブーム」が起きました。神社や寺院の境内でも伝道集会が行われたほどでした。海外の教会、とくにアメリカの教会は、教会をはじめ、キリスト教主義学校や社会団体などを支援しました。アメリカの日系人教会も、自らの教会の再建に取り組みながらも、日本の教会のための援助を惜しみませんでした。アメリカ聖書協会からは大量の日本語聖書が提供され、各家庭に配布されました。

1947（昭和22）年に行われた国会議員選挙では31名のキリスト者議員が生まれました。片山哲は総理となり、森戸辰男、松岡駒吉らは、内閣や国会の重要な役割を担いました。東京大学の総長南原繁は民主的な「教育基本法」（1947年）制定のため尽力しました。



Penguin Club

www.penguinclub.net